

高 取 町 の 仏 像 調 査

飛鳥資料館・美術工芸研究室

昭和54年7月から55年2月にかけて高取町教育委員会の協力を得て、町域内43ヶ寺の550余件に及ぶ仏像彫刻の調査を実施した。この調査は明日香村、桜井市の調査に引き続き、飛鳥及びその周辺の仏教美術作品を対象とした悉皆調査の一環として行ったもので、飛鳥資料館ではその成果に基づきすぐれた仏像彫刻の特別陳列をその都度開催している。今回の調査では白鳳時代から室町時代にかけての作品30軀が見出された。

町域内最古の作品として注目されたのは南法華寺（壺坂寺）の銅造観音菩薩立像である。正面に化仏をあらわした三面頭飾を戴き、腹前で両掌を重ねて宝珠を執り、蓮華座上に直立する装飾豊かな小金銅仏で、その形制は大阪府観心寺の観音菩薩立像に類似している。本像の伝来は残念ながら不明であるが、太宝年間の創建と伝え、7世紀末の古瓦や埴仏が出土する古刹にふさわしい遺品といえよう。

平安時代前期に溯る作品は既に重要文化財に指定されている子島寺の十一面観音立像以外には見い出されなかったが、これに続く平安中期の作品としては下土佐・光明寺の観音菩薩立像と越智・光雲寺の文殊菩薩立像が注目された。両者とも後補の手足・漆箔などがかなり像容を損い、特に光雲寺像は面相部を彫り直しているのが惜しまれるが、両像とも一木造りらしい量感のある作品である。光明寺像は頭体部とも奥行を十分にとり、抑揚のある肉付けや要を得た裳の襞の処理などの表現もすぐれ、正側面ともに均勢もよくとれており10世紀末乃至11世紀初の制作と見られる。光雲寺像は体部背面に背剝を施すが、裳に退化した翻波式衣文や渦文をあらわすなど若干古様を示し、その制作は10世紀後半にまで溯ると思われる。なお本像は現在の京都府宇治市に所在した福清寺旧像を江戸時代に移したことが台座銘により知られた。平安後期の作品は22軀を数え、隣接する地域同様一木造りの素朴な作例から、本格的な寄木造りの彫像まで多岐にわたっている。11世紀の作品では南法華寺の大日如来坐像、清水谷西室院の十一面観音立像、上子島・長円寺の地藏菩薩立像など小像ながらよく整った像容を示す一木像があり、12世紀の作例では西室院不動明王立像、子島寺千手観音立像などいずれも寄木造りになるいかにも平安後期の彫像らしい穏やかな表現の作品が伝えられている。この他、浄土系寺院の本尊のうち、光明寺、松山・天然寺、市尾・如来寺、兵庫・宗運寺などの阿弥陀如来像が12世紀まで溯り、特に光明寺、如来寺などは当時の中央の作風を示す作品として注目された。

鎌倉時代以降の遺例は数少いが、そのうち子島寺の伝坂上田村麻呂倚像は樟材一木造りの神像風の作品で、簡潔な表現ながらいかにも武将らしい表情にあらわされた鎌倉後期の特異な作品として注目され、室町時代の作品では上子島・観音院の十一面観音立像が大永3年（1523）に制作されたことがわかる基準作例として注目された。

（大脇 潔）